

## 「過去と未来が照らす「今」」

(マルコによる福音書13:24-37)

アドベントクランツの始めのろうそくは、「希望」を表しているとされています。わたしたちは「希望」の明かりを灯すことから降臨節を始めます。その希望とは、かつてこの世に来られ、今もわたしたちに語り続けてくださっている主イエスが、再びわたしたちに姿を現し、福音を完全に実現してくださる日への希望です。過去の御降誕の時と、来たるべき時、この二つの時は不可分です。主イエスがこの世に来てくださった事実が、再臨の約束を確かなものにし、わたしたちの未来を照らしているからです。主イエスによってもたらされた福音が、今を生きるわたしたちの足元をも照らし、将来の救いへとわたしたちは歩むことができるのです。そうして、主イエスによって示された未来への希望によって「今」を生きるのがクリスチャンです。ですから、降臨節にあつての「備え」とは、約束されているその日を楽しみに待ち望みつつ、命のみ言葉から喜びと希望をいただいて「今」を生きることなのです。そしてそのように生きることこそ、今日の福音書で語られる「目を覚ましている」ということです。

マルコによる福音書が記された紀元70年頃、既に主イエスは天に昇られています。ですから当時のクリスチャンたちは、わたしたちと同じように主イエスを直接目にはできませんでした。けれども今日の福音は、目には見えずとも、イエス・キリストはあなたがたの中心に今もおられ、弟子たちに語られたように、あなたがたにも語りかけておられる、と語ります。この箇所は当時のクリスチャンに大きな希望を与えたことでしょうか。というのは、マルコ福音書が記された当時のクリスチャンは苦境に立たされていました。キリストを信じる者は会堂を追放されてしまったのです。これは当時では社会からの追放を意味しました。それだけでも非常に厳しいことです。さらに、信仰的、民族的よりどころであったエルサレム神殿がローマによって破壊されてしまいます。自分たちが頼りにしていたものが次々と失われてしまったのです。そのような危機のなかで、クリスチャンたちはさまよいます。ある者は偽メシアや偽預言者に惑わされ、ある者はこの苦しい現実はいエス・キリストがいよいよ再び来られる前兆だ、と過剰に騒ぎ出しました。拠り所を失ったクリスチャンたちは不安や恐れを埋めるため、藁をもすがる思いで様々なものに頼り始め、いつの間にか神から、イエス・キリストのみ言葉から離れていってしまったのです。そのような状況にあったクリスチャンたちに、今日の福音書は語りかけます。「目を覚ましていなさい。オリーブ山で弟子たちに語りかけたように、今も主イエスはあなたがたの中心におられ、あなたがたにみ言葉を語り続けている」と。そうして、危機に瀕していた共同体に対し、どのような現実の中であっても主イエスは共におられ、

み言葉を語ってくださっていることを気づかせ、主イエスにある希望に立ち返らせようとしたのです。

降臨節、日々の営みの中でかき消されてしまうみ言葉に再び立ち返り、イエス・キリストが私たちの中心に「今」おられることを再び感じましょう。そこで今も示されている希望に与ることからわたしたちは歩み始めるのです。その希望と喜びに「今」与ってこそ、わたしたちは過去の御降誕の出来事を心からお祝いし、主が再び来られる未来の時を、心から待ち望むことができます。降臨節、主イエスからの希望に照らされ、良き備えをなすことができますように。